

山城と私

山城27回 仁田 一明

「電光掲示板の『山城』という校名を見ているだけで涙が出てきそうです」――

サッカー部OBのNさんの目が光っている。平成五年正月。東京・国立競技場、全国高校サッカー選手権決勝の舞台に私はいた。山城を卒業して、当時十八年目。京都新聞運動部の記者として母校を取材する幸運に恵まれた。

ぎっしり埋まった山城スタンド席は、チアガールら生徒たちが興奮気味にざわめき、応援の準備に余念がない。東京在住の同級生が私の名を呼ぶ。顔見知りになった選手の父母や、在学当時お世話になった先生方の懐かしい顔、顔……。冬の日差しの中、くつきりと電光板に刻まれてた「京都府立山城高校VS長崎県立国見高校」の文字を見上げると、私の目にもいつしか熱いものがこみ上げてきた。

私たち二十七期生は昭和四十七年から三年間、山城にお世話になった。在学中、石油ショックが起こったが、サッカー

部など体育系など体育系クラブ員を除いて、大半の生徒は至極のほほんと毎日をごして居たように思う。

かく言う私も、学区制で入学した山城高校に格別の思い入れがあったという記憶はない。だが、当時からサッカーの釜本さんや野球の吉田さんから一流選手を輩出している有名校に進んだという誇らしい思いはあった。

だが、在学中さほど感じなかった愛校心というか連帯感が、卒業後年月が経つにつれ、自分の中で膨らんで行ったのは不思議だった。取材先などで、山城出身ということが分かると、双方急にうち解けることができたし、言葉は悪いが、要所要所に三中・山城のOB、OGが根を張るようにいらして、心強く思ったことは再三ではない。これが伝統の重みというものだろう。

傾き始めた冬の日差しの中、山城イレブンが準優勝メダルをもらった。表彰式を見守る取材陣の中に、私を含め山城のOBが三人いた。三年先輩のKBS京都のディレクターのTさん、スポーツニッポンのHさんは二十年以上の大先輩だ。二人とも選手を見る目がいつになく優しい。

「仁田、ええ記事書いてやれよ。地元紙しか書けんやつをな」。

Hさんが一転怖い目で私を睨み付ける。Tディレクターは普段の饒舌とは打って変わり、しみじみグラウンドを見つめている。

私はその傍らで、後輩達の優勝をいつまでも目に焼き付けていた。